

---

# ベタなRPGの中に入ってしまった

椎名 素一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ベタなRPGの中に入ってしまった

### 【Nコード】

N4945Y

### 【作者名】

椎名 素一

### 【あらすじ】

主人公はベタなRPGが好きなダメ人間。  
その友達の変人が、RPGの中に吸い込まれます。  
そこで、魔王倒しに行きます。

吸い込まれた（前書き）

この設定がベタだよね。

## 吸い込まれた

俺はベツタベタなRPGが大好きな、新高校一年生。第一志望の高校にギリギリで受かり、有頂天な気分浸っている、ダメな人だ。そんな俺にも一応友達と言える人が数人……いや、嘘をつきましたごめんなさい。一人です、はい。

そいつは「俺にとって変人と言われる事は、ほめられているのと同じだ!」と豪語する変態で

名は窪木夕くぼきゆうと言う。ちなみにそいつは不登校かつネクラという疎遠される属性を持っている。俺こと崇奇運命すつきうんめいはネクラで不登校になりかけである。

……「類は友を呼ぶ」とはこの事だろうか？ 自分で言ってる、もの凄く悲しくなる。

まあそれは置いて。俺はこの前ネットで面白そうなRPGを見つけた。

名前は「魔王を倒そう」……普通の人には超超超超つまらなく見えるだろう。

だがしかし、俺と夕はこの、実にベタベタそうなゲームが大好きだ。

そして一週間待って待って待ち続けた。その間夕はもちろん不登校、俺は一週間のうち三日しか行かなかった。そして……

「届いたあああっつっ!」

俺は歓喜のあまり叫びながら自室を走り回った。

母親に思いつき怒られた。

まそんな事は気にせず、すぐさま夕にメールした。

件名：届いたか？

本文：おいつ、俺のところにあのゲームが今届いたぞ。

簡潔にまとめて送信した。

すぐさま、返事が返ってきた。流石ネクラ歴五年の腕だ、速すぎるくらいの速さで返信が返ってきた。

件名：届いてるよ

本文：届いてるし、いちいちメールして来るな。

いらつ、ときたがそれもまあ仕方が無い。

なにせあいつは天才的な腕前のハッカーだからなあ。それで毎月500万は稼いでいるらしい。

そういふ奴なので、邪魔はせずP〇3に「魔王を倒そう」を入れて電源を入れた。

ジジジジジジ……ガキョンツツ！！

「ぎゃあああああつっつっ！！」

お、俺のP〇3がああああつっつっ！ やつべ〜よ、これ母親と父親にねだりまくってやっと買ってもらえた代物だぞっ！ この野郎！と俺が心の中で発狂していると、急にガキョンという音がしなくなり、ジジジジ……

と、もとの音に戻った。

そして画面が真っ白になった途端に、俺は体が画面の中に吸い込まれていく感覚に陥った。

いや、吸い込まれている。ガチで。

「え、ええ、何何何何！？ やだよ！？ やだやだやだやだ。う…

…っ、うぎゃあああ

結局画面の中に入ってしまった。

俺の体は落ちてゆく、もの凄い浮遊感。そして真っ暗。目を開けているのに真っ暗って、気持ち悪いよね。

そして……

ドサッ

かなり高い所から落ちたのに、全然衝撃が少なかった。なのに、足が全く動かなかった。足の指一本も動かせない。目は徐々に見えるようになってきた。

部屋の中にいたはずなのに下には土の感触があり、何かに覗き込まれている気がする。

……怖い、超怖い。だが俺も男、意を決して目を開けてみるとそこには……

犬がいた。三頭犬だった。

「……………」

声が出なかった。とりあえず、ゆっくり、ゆっくり後ずさる。だがそれに合わせて三頭犬の方も、ゆっくり、ゆっくり近づいてきた。

ゆっくり後ずさるのは無理だと思った瞬間、犬に背を向けてダッシュしていた。

体が勝手に逃げを選んでしまうのって、情けねえなあ。

って、そんな場合じゃないだろ俺！ とりあえず逃げろんだ！

「うおおおおおおお！」

俺はこのあと、俺と同じ境遇の奴に会う事になる。

吸い込まれた（後書き）

気がついた所があったら、指摘してください。



## ついに冒険へ

俺は高校に受かって有頂天になってるダメ人間。

友達もネクラなやつだけ、しかも一人だけ。

そしてベタなRPGが大好き。ネットで探しては買いあさっている。そして買ってみたゲーム「魔王を倒そう」……涎が出そうなほどのベタベタRPG。

ゲーム機に入れて電源を付けてみた。そしたら……

吸い込まれた。

ゲーム画面に。

そしてモンスター（三頭犬）に追っかけられる俺。おっと、こんな事を考えている暇に追いつかれたあああああ！！

「ひいひいひいひい。く……っ、くるなあああ」

お決まりの台詞を吐きながら逃げる俺。あ、あんな所に丁度良い穴が開いている木が。

最後の力を振り絞れええええ！！

「うにゃおう¥＃\$%&\$%&\$＃¥\$%」

力を出しすぎて口から変な声が出たが、気にしている暇が無いからな。

そして……

「うりゃあ」

ガンツ！ ふー、間に合った。さすがに死ぬかと思った。でも、もうこの穴の中にいれば大丈夫だ。

ふー、ネクラに走らせる距離じゃねえなあ。こういう時は深呼吸だな。

スーハー、スーハー、スーハー、スーかさつハー？

おいちよつと待て、何か奥の方で音がしたぞ？ ……気のせいだよな。まあ、まだ息が切れているので深呼吸、深呼吸。

スーかさつハー、スーかさつハー？、スーかさかさつハー！？、スーかさかさつはあああつっ！？

「うおおおい」

なっ、何だ？ ちよつと、ちよつと、ちよつと。まだ死にたくないよお。

「……数奇か？」

この声はどこかで聞いた事がある。あれ？ でもどこだっけなあ。

「…お前の唯一無二の親友を忘れたのか？ かなり傷ついたぞ！」

「ああ、お前かあタ！」

おお、ここで唯一無二の親友と出会えるとは。全っ然嬉しくないけどね。まだ穴の外で犬がバウバウいつてるしね。

30分後

「なあ、もう犬去ったかなあ」

「…ああ、もう大丈夫だろう」

三頭犬の恐怖にさいなまれる事、三十分。ずっと穴の中で他愛もない会話をしながら耐えた（恐怖感じてないんじゃないやね、ていうぐらいの他愛もない会話）その時、ふと声がした。

『いや〜追い払うのに苦労したねえ』

「なあ、今のお前の声？」

「…ちがう」

「今の外から聞こえたよな」

「…ああ」

と、いうわけで、穴の外に出る。そして空を見てみるとそこには…

… 仏陀がいた。

後光が輝いている。

初対面なのでタメ語を使う。

「えつと、助けてくれてありがとうとございました」「

いきなりタメ語!？」

「おお」「

えつ、なぐに」

「ノリ良いんですね」「

「うん、仏陀だから」

「関係ないよねえ!」

あれ? 急に夕が黙った。と思ひ夕を見てみると、目を開けたまま寝ていた。

凄いね。感心する。目の前に神がいるのにな。

「あら、寝てる?」

「さーせん」

「ねえ、その口調もうやめてくんない? ま、いいや。

とりあえず、どっちが勇者になるか決めて」

「ええ!」「

その宣言を聞いてすぐさま睨みあう俺と夕。そして……

「俺がお供だつっつ!」「

「ええええええええ!」

「ジャンケンポン!」「

「ええええええええ!」

「ぐあああああ」

「……(キリッ)「

『ええつとね、なんで脇役を争ってるんだい？』

「脇役の方が見せ場多いからに決まってるでしょう！」「

俺と夕の長い説明が始まったので割愛します。

### 3 時間後

『あつ、もういい。数奇が勇者。夕が魔法使いね』

「あああああ！」

「……………（キラッ）」

『はいはい、装備と剣は着けといたから』

「えっ」「

はっ、いつの間！ もっとこうなんかねえ、ピカッとなるとかないもんかね。

『じゃあ、東にずっと進んでそしたら町があるから』

「おいつ、何ていう町か教え……………」

シュツ

二人取り残された。

「……………行くか……………」

「…行くこう」

とりあえず腰についてたコンパスで、東はどっちかなあと探して、とりあえず東へ向かった。

このゲームの世界で何とかやっていけるだろうか？

俺と夕はそんな心配をしつつも、魔王を倒す冒険へと出かけた。



## 初バトルと新仲間（舞踏家）

テレテツテ〜テテテツテテ

何も無いところからBGMが流れてくる。

お馴染みのドラ○工定番ソングだ。

……てか、ドラク○のBGM使っちゃダメだよ。中国並みのパクリもんだよ。

「…なあ、数奇。俺たちなんで勇者と従者になる事、をあんなに素直に受け入れたんだ？」

「……うん、それ言っちゃお終いだろ。俺も思ってたけどね」

確かに。たぶん現実じゃあろくな生活送ってないからだろうな。

ネクラ○n不登校だし、モテないし、オタクだし、ゲーム中毒なりかけてたし……

もうこれ以上自虐すると心が折れるので、もう言わないでおく。

あともう一つ思っていたことがあるのだが。

「お前の格好いかにも魔法使いだよな」

そう、格好がベタ過ぎるのだ。

体全部を覆えるぐらい長いローブに、いかにも「魔法使いです！」って感じのステッキ。

ローブの内側には小さなビンがいっぱいあり、「ポーション」とか「攻撃up」とか書いてある。

なんでupじゃなくて「up」なんだよ！ とつつこみたくなる。

まあそれはいい。ベタ過ぎるけど、タの格好は良い。

それに比べて俺は……

「…ふっ、似合ってるぞ」

イラッ

「嘘つけ！ 何でポロシャツに入れパンで頭にネクタイ巻いてんだよっ！

何で腰と足だけちゃんとした装備なんだよっ！ 足と腰だけ見たらむっちゃ強そうなのに、上半身で 台無しだよっ！ しかも装備が 武器A：フィギュアの入った紙袋 ってなんだよっ！

これあれだよねえ、『30過ぎて童貞な人は、魔法使いになる』だよねえっ！」

何であんな迷信の装備に固められるの？ もうこれ装備でもないよね。

「…仏陀が決めた事さっ（キラッ）」

「黙れえええっつっつっ！」

もう、ブチ切れた。

たまらず叫ぶ俺、聞き流す夕、微笑ましくこっちを見てる仏陀。

……落ち着け俺。いきなり文句言ったら装備を変えられるかもよ（もっとうどく）

そして心を落ち着けた俺は、仏陀に文句を言う為口を開いた。

「……あの、この装備……変えろやこのクソがあああっつっ！」

あ、本音出ちゃった。

『まあまあ、おうちっけ』

「これが落ち着いていられるか！ しかもうぜー」

『はいはい……』

急に黙る仏陀。鼻をほじりながら目を強くつぶって、何か念じている感じに見える。

と、次第に仏陀の周りの後光が強くなってピカッと光った。

瞬間、俺の体にかかるずっしりとくる重み。

自分の体を見てみると………凄い。

なんかもう、凄い、しか出てこないほど綺麗な鎧があった。自分の語彙の少なさが悲しかった。

『ほい、こんなもんでどうよ』

と自慢げに言ってくる仏陀。

ここは素直にありがとうと言っ

「ありがとうございます（最初っからこれにしとけや）」

『神に向かって何だよその口の聞き方は』

「別にいいだろう気〜に〜する〜な」

『うっぜー。いやもうマジうっぜーな！』

心を読まれた事はあえてスルー。

「じゃあ、これから冒険するんで」

『あ、ちよつと待っ………』

シュッ

よし。

「じゃあ行くか。夕」

「…ああ」

神に暴言を吐いたことには何も触れてこない。夕、さすがだ。

普通のRPGだったら神に暴言は禁忌だけどね、あれはうざ過ぎだつたからね。

そして他愛もない話をしながら歩き出そうとした途端、バトルBG Mが流れてきた。

「うおっ」

「やっとか」

身構える俺と夕。俺は腰の剣を引き抜き、夕は杖を構える。



テレテレレ〜

バトルBGMまで○ラクエだし。  
そしてウィンドウが現れた。すごくRPGっぽいよね。

敵A：ス○イムが現れた。

敵B：まゆゾ○が現れた。

敵C：女舞踏家が現れた。

「嘘だろおおおつつつつ!!」「」

色々おかしいよね。パクリ魔が過ぎるぜ、このゲーム。

○ラクエパクってるし、銀○パクってるし、最後にいたっては普通の人だし!

女舞踏家ってなんだよ! これ字間違えてるよねえ、「武闘家」こっちだよねえっ!

「よし、殺るか」

「ねえ、何が『よし』なのお!」

と言いつつも、自分のウィンドウのコマンドを選ぶ俺。

・戦う・逃げる・スペシャル・超必

おお、いきなり超必あるじゃん。でもまあ無難に「戦う」だろうな。と、コマンドを選び終えた俺は、夕のコマンドも気になったので覗いてみた。

・「死に絶えるクスどもっ!」  
・「消え去れ」  
・魔法  
・「世界支配」  
・逃げる

「ちよつと待てええつっつ！」

夕が迷わず「世界支配」を押そうとしたので、慌てて止める俺。つうか何なの？ このコマンドの違いは。

もう最後の「逃げる」にいたっては意味が分からねえ。

どっちに言ってるの？ 相手に言ってるの？ それとも俺に言ってるの！？

「なぜ止める。これ押したら魔王も支配できて、ゲームを終わらせる事ができるんだぞ」

あ、確かに。

……いやっ、ちげーよ。危ないなあ俺。言い包められそうになっ  
んぞ。

「いやっ、自分たちの力でやってみよーぜ。なっ」

「…しようがないな」

と夕は「魔法」のコマンドを押した。

そうするとまたコマンドが出てきた。

・デスポール・ベホーマ・アルマゲドン・I KILL YOU

「作者ああああ」

もうパクリ過ぎだよ。次はドラゴボールかよ。

もういいよ。

夕と俺は一気にテンション、ダダ下がりで適当に「デスポール」を選んだ。

・誰にしますか、と出てきたので俺はスライ○を、夕はまゆゾ○を選んだ。

「……っ！」

タッタッタッタッ

俺の足が勝手に動いて、スライ○の前まで来た。操られてるみたいで気持ち悪かったが、剣をスライ○に向けて振り下ろした。その刹那。

ブッシャアアアアア

スライ○が血を吹いて倒れた。そして消えた、血も一緒に。

「……リアル過ぎるだろ！」

心から思った言葉だった。

そして夕も、まゆゾ○に向けて「デスポール」を放った。

「くられ、デスポール」（効果音・フリ○ザ様の声で）

地響き、爆炎、煙。

「デスポール」が当たった所は、何もなかった。本当に何もなくなっていた。

綺麗に吹き飛ばされていた。

あまりの威力の強さにドン引きした。

「……ふっ」

殺った。という感じで、笑みを浮かべた夕を見て引いた。さすがになかった。

そして相手のターン。



初バトルと新仲間（舞踏家）（後書き）

パクリ過ぎてすみません。

## 町への道のり

「さっ、行きましょう」

「お、おお」

よっ、数奇だおっ！

……うん、超×100気持ち悪かったね。ごめんね、無理にハイテンション風にしてみたけど、やっぱり気持ち悪かったね。でもね、無理にでもそういうテンション作らないと無理そうなんだ。

……だって一人増えてるんだもの、仲間。

俺が覚えてるのは……

(回相中)

「くらえ、デスポール」

爆炎、地響き、煙。

(回相終了)

これだけなんだよね、わざわざ(回相中)とかつけなくていい長さだよ。

まあそれはいいとして、とりあえず素性を知らなければ。

ここでの無難な策、1番・名前を聞く、実行。

「あ、あの〜」

「…何だ、下手に回って気持ち悪い」

「お前じゃねえよ！ 流れで分かるだろうが！」

「……ああ、なるほど」

「この女の素性だろう」と小声で言ってくる夕、「ああ」と返す俺。小声でひそひそと作戦会議する俺と夕。そして俺たちはある一つの結論にいたった。

「「そうだ！ ウィンドウを見よう」「

その結論に至った俺たちは、即座にウィンドウを呼び出し（頭の中で「来い」と念じると出てくる）

『仲間プロフ』と表示されてるものにタッチした。

その瞬間、空を飛ぶ鳥が空中で静止し、笑顔の女の人が片足を上げたまま止まった。

おお、リアル。本当にゲームの世界みたいだ……ってゲームの世界なんだけどね。

名前：（無し）

女：舞踏家

LV：10 HP：150 MP：50

コメント：重い過去がっ！？

「普通だな」

「…ああ、普通すぎてびっくりしている」

「うん」

いや、でも最初っからLV10って強くな。つつか「重い過去がっ！？」って何だよ。

「…スラーム戦の時に、経験値1万5千くらい入ったしな」

「何でスラームでそんなに経験値入るんだよ」

「…金も百万ぐらい入ったしな」

「マジでー！」

いや、スラーム案外いいな。ただの弱い雑魚だと思ってたのに。

「でも、名前ないんだな」

「ああ」

そう、何でスルーしたんだろうね。しかも、舞踏家だしね。

「…もうネロでよくない」

「超、適当だな！ まあいいけど」

ここで良いって言っっちゃ俺もどうかと思っけどな。

あ、そっぴゃあ俺たちのプロフってどうなってるんだろう。と、いう訳で俺の情報にタッチ。

名前：数奇 運命

男：勇者

勇者って職業に入るのか！？

LV：20

最初っから10LVだったんだ。

HP：250 MP：150

おお、さすが勇者。高めに設定されているな。

コメント：「うおおお¥\$%&#%&# \$」

「コメントひどっ！ これ一番最初のやつだよね」

まあ、こんな感じのプロフィールだった。

と、ここで気になるのがタのプロフィール。だって魔法の技が全部殺し系だったし。

という訳でタッチしてみる。



名前：デスブレイカー・タ

男：闇の魔法使い

LV：11000

HP：10000 MP：5000

コメント：死に腐れクズども。俺の上に立つな、俺の下にも立つな。消えろ。

「な、何じゃこりやああああああっつつつつ！！！！！！」

「おかしいだろ！ マジでバグってるよ、このゲーム。デスブレイカー・タって何だよ。どこで付いたその二つ名！ コメントもいきりすぎだろうが！と心の中で発狂した。主人公俺だよな。」

タは俺と一緒に自分のステータスを見て「フッフ、ふふふ」と不気味に笑っていた。

もうマジで戻りてーなあ、現実に。

\*\*\*\*\*

かくして、俺たちは一旦ウィンドウをしまい、舞踏家ならぬ「ネロ」に名前が決まったと伝えた。

「は？ 何の事ですか？」

「……いやっ、名前ないんだろっ」

切り込んだあああつつつ！ あまりにも、いきなりすぎじゃなかる

うか。

「はっ、何故それを!？」

乗っちゃうんだ……

「…という訳でネロという名前になったんで」

「分かりました……ポッ」

何で照れたんだろう? あ、名前付けられて嬉しかったのか。

ああ、納得。

「…さあ行こう町はもうすぐだろう」

「はい!」

おゝい、ちよつと主人公俺だよ。俺だよっ!

……行っちゃった………ついて行くか………

何かぐだぐだだったけどなあ。



## 町への道のり（後書き）

今日は調子が悪い作者が書いたので、下手な文法とかになってる所があったら、指摘してください。

## 脱出のススメ(前書き)

頑張っ  
て書いて  
みようと  
思います。

## 脱出のススメ

「「「はあ」「」」

どうも、数奇です。

今俺たちがいるのは、プリズンです！……かつこよく言ってみただけどここは 牢屋 だ。

口調も、ですます口調から普通に返させてもらうことにする。

と、ここでネロが俺に問いかけてくる。さっきから何度も同じ事しか問いかけてこない。

「あの、どうやって出ます？」

「今脱出経路を探してるから待ってる！」

「は、はい！」

俺と夕が声を揃えて怒鳴ると、ネロは『すいませんでした』というように牢屋の隅に腰掛ける。

ここで現状をまとめておこう。

今俺たちがいるのは牢屋、これは間違いない。床……ではなく下は土。壁はレンガ。小窓が付いているが鉄格子がはめられている。まあ普通通りの牢屋だ。

夕の魔法を使えばこの世ごと吹き飛ばせるのに、なぜこんなに苦労して脱出経路を探しているかというところ。

「何で夕さんの魔法使わないんですか？」

おお、来たああああ！ 待ってましたこの質問。

そして俺と夕は目を合わせ、息をそろえてこう言った。

「絶対に脱出経路か、フラグがある！ だって、ベタなRPGだから！」

最後はやっぱりチャン・ドンゴン。古いと思うな。「くだから」という言葉の最後はチャン・ドンゴンだと俺と夕の間で決まっている

から。いや、そんなどうでもいいことは置いて、なぜ牢屋にぶち込まれているのかを説明しようと思う。

### 1 時間位前？

目の前には道、果てしないと思えるほど長いクネクネと曲がった道。スライム戦が終わってから敵にも会わない、人にも会わない。さすがにおかしいと思いつつも、6時間ぶっ続けで歩いている。皆疲労困憊だ……夕以外は、だけどね。

「も、もう休みませんか」

「賛成の意を表示する」

「……もう休むのか」

「現実世界でのお前よりかはましじゃ！」

「……今はRPGも世界にいるんだぞ？ そんな屁理屈が通用するとも思っただか？」

うわっ、うぜー。確かにその通りだけど屁理屈は夕が言っているよね。

「……ふんっ、仕方がないな」

お前何様だよ。勇者俺んだけど……勇者俺んだけど!?

そこまで思っただけ、とネロと一緒に腰を落ち着けようとしたところで……

「……と、言っただけ思っただか？」

「うっぜえええええええええ!!」

「うざいですうううううう!!」

二人揃って膝を折り、地面に手を着き完全に降伏した。

「……さあ、行くぞ」

と夕は言い、先に歩いて行ってしまっ。

鬼畜！ 鬼！ いやっ、歩く殺戮兵器！ と心の中で毒つきながら

ネロと何とか立ち上がる。

そういえば夕、何で疲れないんだろう？ ふと気になったので夕をよーく観察してみた。

……おおすごいっている……おっと、危ない。怒りのせいで棒読みになってしまふ所だった。

もうすでになつちやってるけどね。

そして俺は鞘ごと剣を背中から外し、夕に襲い掛かった。

「うおらあああつつつ！」

それを華麗に避ける夕。

俺の横なぎ、縦なぎを避けながら、俺をなだめようと猫なで声で話しかけてきた。

「…お、おい、やめる血迷うな、浮いている事については謝ろう。だが俺は何もしていない。

疲れるから歩きたくないなあ、と思っていたら勝手に体が浮いていたんだ」

はいっ、確定。

「おい、俺はまだ何も言ってないぞ？　なのにどうして弁解しようとする」

「…ギクッ！」

おお、初めて「ギクッ！」って言いながら飛びずさるやつ見たわ。ずっと昔から「何でアニメとかの人物が飛びずさる時、『ギクッ』って言うんだらう？」

とは思っていたが、実際にいたんだなあ。

……おっと、感心している暇じゃない。今はこいつを殺らなければいけないという、最優先事項が目の前にぶら下がっている。

「夕……覚悟はいいか？」

「…や、やめる。く、来るな、寄るな、近づくなあああつつつ！」  
さあ、リンチタイムの始まりだ！



ゴキツバキヤツバキツボゴツグシャツブツシヤアアツツ

おっと手が滑った、鞘外しちゃったなあ。

俺が夕をリンチに似た殺人行為してる間、ネロはポーっとリンチを見ていたが、ふとこんな事を言った

「はあ、本当に疲れましたね、宿でもあればいいんですけどねえ」と、この言葉がフラグだったようで、道の端っこに宿ができた……この表現には語弊が合ったので言い直すと、現れたというほうが正しい。

「…丁度良かった、入るか」

「いつの間に!? というか回復系の魔法あつたんだ」

「…一応魔法使いらしく、補助系の魔法もあるぞ」

まあ、いい。じゃあ行くか、と言おうとしたその時。

ネロがまた俺の台詞を奪っていた。

「じゃあ、入りまっしょっか」

「ねえ、それ俺の台詞。とらないでくれる?」

「…ああ、行くか」

「ねえ、話し聞いている?」

と、また置いてけぼりを喰らう俺、悲しすぎるよ。

と思いつながら入っていった。

宿の名前は『魔王の城』……絶対に化け物が幻覚見せてるよね。

『魔王の城』に入ると『魔王の城』のウェイターが「勇者様ご一行ですね。話は魔おう……っ、ゴホゴホ、仏陀様から聞いておりますでは、ご食事の方へご案内いたします」といつて大きなテーブルに案内してくれた。

……うん、思いつきり魔王って言いそうになったよね。でもね、っつこまないよ。

だって待ちに待ったフラグが立っただんだもの。

そして運ばれてきた料理を一口食べた途端、一人一人料理に顔を埋めていた。

最後まで耐えた俺も結局は眠ってしまった。

終了

で今に至る。ちょっと長くなってしまったが、まあこんな感じだ。ふう、こんな事を考えていたら、夕がダウンして、ネロも寝てしまっているではないか。

はあ、魔王を倒すのにも苦勞するんだなあ。と思ったところで急激に眠気が襲ってきた。最後に一言残しとくか。

「睡眠欲に勝てるやつはい……な……ふい……」

朝

「ふあ……」

俺は目が覚めた。ここはどこだ？ ……何てな。

小窓からは朝日の光が差し込んでいる。実に気持ちいい朝だ。んゝ暇だから皆がいるか確認しよう。

夕は居る。ネロも居る。そしてデブも居る……え、デブ？

はい、緊急事態発生。

と、いうわけで皆を起こす（デブ以外）そして相談する。

「おい、どうする？」

「…殺るしかないだろ」

「そうですね」

「なんでそうなる！？ ネロにいたっては寝ぼけてて聞いてないだろ！」

予想どおりの答え。一応つつこむ。

ゴソゴソッ

「……っ！」「」  
やべえ、起きちゃった。

そのデブが自分に掛けていた毛布をかばんの中にしまい、「はあ、またか」と言っただアに近づいて、鍵穴の中に針金を入れ、がちやがちやとピッキングし始めた。

そのデブがピッキング始めて5秒後。

ガチャッ

鍵が開いた。

「……うそだろ……」「」

そしてデブは当然のように出て行く……

「さっきからデブデブ言い過ぎだよおおおっっっ！……」

新たな仲間が増えたな、と思った。



脱出のススメ(後書き)

ふう、書けた書けた。

## 新仲間・デブと共に宿DEバトル。

俺は勇者、こと数奇だ。

今俺は新たなる仲間が増えた瞬間に出くわしている。牢屋を出て地下迷宮を抜け、地上に出る階段の前で。

先ほど俺たちを狭い牢屋の中から出してくれた、このバトルの時は何もしなかったデブは……

「デブって言わないでください！」

……このように人の心の中を読めるという特殊能力を持ち合わせている。気になったのはデブだけだったらしい。

そしてフラグが立った宿で出会ったため、仲間に入れることを即決した。

そして説得しながらこの場所まで来た。

このデブは……

「も、もういいですよデブで！ ポツチャリなだけなんですよ！」

……かなりの銭ゲバで貪欲だったらしく、夕が「……この勇者一行の仲間になれば、金と地位と名誉が手に入るぞ」と、言うつとすぐに「仲間になります！」と、驚きの速さで仲間になる事を承諾した。

と、こんな事がありながらも、敵を倒しながら まあ、ほとんど夕の『死に腐れクズ共』で一撃だったのだが ここまで来た。

その間に俺たちは全員10LVぐらいは上がった……全部スラムでね。

ここでデブについてのプロフィール……

「やっぱりポツチャリって言うてくださ……」

「一々うるせえんだよ！ さっきからよお、何なんだよ人の心の中好き勝手読みやがってよお。」

てめえの事を読者様に紹介してやってんだぞ！？ 黙ってるこの

デブ！ メンバーから外すぞ！」

「すいませんでした！」

即土下座して来た。ほんとに金の為ならプライドなんか捨てれるみたいだな。

絶対にこういう奴にはなりたくないな。

もう、プロフィールを説明するのはめんどくさくなってきたんだが、一応仲間なのでおこごとと思う。

LV:15

HP:50 MP:150

と、まあ普通に平均値だ。あ、もう一つ忘れていた。

・デブ

うん、すつきりした。

デブは俺の事を恨めしそうな目で見つめてきたが無視した。誰だつて次がこの宿のボス戦だったらそうするだろう？ ボス戦の前のバトルが全部スライム しかも能力値がスライムじゃないだろっ！ つてびつくりするほどのスライム は、どうかと思うけどな。

まあ、そんな事はいい。とりあえず次がボス戦なので、しっかりと気合を入れる。

「…よし！ 行こう！」

う、嘘だろー。な、何でここまで……ひどい扱いを受けなければならぬ！？

そして俺は今一番思っていることを腹の底から空……天井に向けて言い放った。

「俺の台詞を全部持つてくんなああああっ！……！！！」

俺の叫び声は虚しく地下深く魔で響いた。

そんな俺を気にもしていない様子で、皆、上にかかる階段を上っていった。

俺はプライドがズツタズタのポツロポロになったところで、やっと動いた。自分で動かしている感じではなかった、たぶんバトルが始まるから自動的に戦闘場所へ連れて行ってくれるのだろう。もう、あんなやつらとやっていける気がしなかった。

テレレレレレレレレレレ

そしてバトルが始まった。

場所は先ほどの宿のロビーだった。

そして出てきたボスは……一番最初に出てきた「魔おう……っ、ゴホゴホ」のウェイターだった。

すっごくベタベタな展開、涎が出てきそうだ……じゆる。

とここでウェイターが最初の時とは正反対の野太い声で喋り始めた。少し怖い、腹に響く声だ。何かにたとえるとすると……和太鼓みた

いだ。  
『ふはははははっ、よくぞここまで来れたな。それだけは褒めてやるう。』

しかし、お前らを魔王様のところへは行けん。なぜなら……』

ふっ、その先は言わずとも分かるぜ。

というわけで、台詞を横取りするぜ！

「「ここで死ぬからだ！」」

俺と夕は全く同じタイミングかつ、声を八モらせて台詞を横取りし



た。

こういつときに息が合うのが親友だよな。

『台詞を取るなああつつつ！』

「ナイスツツコミ！」

褒め称えるぜ！

『え、そう？ なーんか照れるな……じゃない！ いいからバトルに入るぞ！』

「いや、もうバトルに入ってるんですけど」

的確につっこむ俺、うーんいいね。ナルシストじゃないよ。

そしてバトルウィンドウが開かれ、敵の名前、LV、HPが現れた。

ウエイター  
菟威蛇亞

LV：15

HP：100

「名前がウエイターだったああつつつ！？」

全員でつつこむ。そして、すげえ弱い。

まあ、今はバトルに集中だ。

そして俺たちの名前、LV、HP、MPが現れた。

数奇

LV：30 HP：300 MP：200

うん、さっきの連続スラム戦で10LV上がったもんな。

タ

LV:12000 HP:15000 MP:10000

一人だけ数値の上がりかたがパネエ！

ネロ

LV:25 HP:250 MP:150

いたって普通だな。

デブ

LV:20 HP:170 MP:250

この中では一番弱いな。

そして俺たちは、各々ウィンドウから技を選んだ。

俺:二連切り

ネロ:攻撃力upの舞い

タ:デ○ボール

デブ:ホット

俺が選んだ 二連切り はスラム連戦の時に覚えた技で、ネロ、夕はもとから覚えていた技を選んだ。俺たちの技は名前を見て分かるのだが、デブの選んだ ホット の意味がわからない。まあ、それはお楽しみという事だろう。

俺たちの方がLVが高かったので、先攻は俺たちになった。

……さらば菟威蛇亞。お前は見せ場なくして終わったな。

「攻撃力upの舞！」

おいおい、勝手に始めんなよ。

そしてネロは舞い始めた。舞うといっても片足立ちして、クルクルと回っていただけだった。

ネロがクルクルと回り終わった（決めポーズとか全くなかった）瞬間。

ガチヨンキョ

という音と共に赤いベールが体を包み込んだ。

最初は何の効果もなかったのだが、だんだんと腹の底から力が沸いて来るのが分かった。

舞い終わったネロは一步下がりが、代わりにデブが一步前に出た。

デブは手を上にあげ、かつこいい……と、自分で思ったのだろう決め顔を作り、「ホット!!!」と叫んだ。

俺と夕は何が起こるんだろうとわくわくしていたが、結局何も起こらず、デブも一步下がった。

……ちよっと納得いかないな。聞いとくか。

と、俺はデブに近づいていき、何の呪文かと聞いてみた。

「おいデブ、何したんだよ」

「は、はい。もう少しでき始めますよ」

「へえ、何、毒とか？」

「違います。文字の意味考えてくださいよ」

「ホット だから燃えるとか？」

「あ、はい。ある意味そうですね。」

ん？ 何だ？ と思っていると、急に菟威蛇亞が『うおおおっつっ  
！』と叫びだした。

ここでふいにウィンドウが開いた。

《菟威蛇亞の心が燃え盛った》

「嘘だろおおおっつっつ！？」

松尾課称造になってる！

『もっと熱くなれよおおおっつっ！』

うるさい！ 予想以上にうるさい！ 暑苦しい！

なので、問答無用で切る。

「二連切り！！」

ズシュツ、ブツシャアアアツ！

鈍い音が響いたと思った瞬間、血が吹き出していた。

『こんな怪我は治ると思えば治るんだ！』

暑苦しいいいいい！ もうやっっちゃえタ！

「デス〇ール」

地響き、爆炎、煙。

この技を始めてみたネロは「わあ、凄いですう」と言い、デブは「あ……っ」と、言葉を失っていた。

まあ、始めて見たときはそうなるよね、ネロ以外はただ。

とここでウィンドウが現れて嬉しいお知らせしてくれた。

その前に菟威蛇亞に追悼の意を捧げよう。俺は手を胸の中心に当て「安らかに逝きますように」と願った。

《菟威蛇亞を倒しました!》

そして俺のウィンドウからも手に入れた経験値などが表示された。

《経験値1000を手に入れた。金を150000手に入れた》

相変わらずバグってるんじゃないかねえか？ と疑問を持つくらいに金だな。

そんな事は置いといて、とりあえず俺の目標は、町へ早急に行かなければ行けない。

そして台詞を言われてしまう前に言わなければならぬと言う事だ。よし、息を大きく吸って……

「よし、いっ……っ」

「…よし行くか」

「はい!」

「は……い……」

「もう、心が折れたよおおおっっっ!」

…そして勇者一行は町へ急ぐのだった。続く。

「最後の締めのお詞まで言われたら、おしまいだよおおお！」

つづく。

## 町への最終難関

「……はぁ……」  
どうも数奇だ。この挨拶は定番にしようと思っている。  
……って挨拶の事なんか今はどうでもいい！  
俺たち勇者一行は大きな山のせいで立ち往生している。  
何だ、そんな夕の魔法で消し飛ばせばいいのに、って思ったやつ  
もいると思うがそれができないんだよね。さっき仏陀を呼んで会話  
したんだけどさ……

10分前

「うわっ、なんだこの山。でかすぎだろ」  
「……確かにでかいな」  
俺たちが今何しているかと聞かれれば答えてあげるが世の情け……  
超気持ち悪いな。  
今俺達は何をしているかというと、ウエイター菟威蛇亞を倒した後ずっと歩いてたんだよ。  
とにかく歩いてたんだよ。そしたらよ、でかい山があったんだよ。  
正直めんどくさいだろ登の。  
まるで勇者とは思えないよね、この口調。  
と、いう訳で仏陀を呼ぼう。  
はい、せーの

「仏っ陀ー！ー！」  
その瞬間この世の光とは思えないほどの眩しい光を出しながら仏陀  
が出てきた。

『はい、仏陀お兄さんだよ。皆元気？』  
さあ、皆声をそろえて……

「」「キモツ！……！」

『この流れ作っただの勇者じゃん！』

「今日もツッコミが冴えわたってますね」

『え、あ、そう？ 何か照れ……無いよ！』

ああ、ほんとに冴えわたってるぜ。  
ボケて気持ちいい。

とここでデブが、眉に皺を寄せながら仏陀がいる辺りをきよるきよるを見ていた。

「おい、どうしたんだよデブ」

そう聞くとデブは逆に信じられないという顔で、逆に聞いてきた。

「えっと、数奇さんは誰と話しているんですか？」

「え、仏陀だけ……あれ、もしかして見えないの？」

「はい」

それを聞くと仏陀は面白そうな顔をした。

『へえ、俺の姿が見えないほど汚いやつがこの世にいたんだな』

「……………」

「え、何て言っただんですか？ 数奇さん」

『へえ、俺の姿が見えないほど汚いやつがこの世にいたんだな』

「ひつど！ そんな事神様が言うんですか」

「言うよ平気で」

ぎゃあああつ、僕の神様へのイメージがああつ！ とデブが地面をぐるぐる転がりまわっている間

本題へ入る事にした。

「ところで仏陀よお、この山どうすんだよ」

『いや、まあ教えてもいいけどさ、その口調直すつもりは……』

「無い！」



「ビックリマーク付けるぐらいの勢いで言わなくても……、まあいや。」

「この山はね、登るしか……」

「はい、あざした」

『ちよっ、まっ……っ！』

仏陀はシュンツと消えていった。

終わり

で、どうしていいか分からなくってね。

皆で考えているところだ、考え始めてかれこれ30分にもなる。

「あの、私考えたんですけど」

と急にネロがしゃべり始めた。

そしてこの状況が打開された。

「タさんの魔法にアルマゲドンってありましたよね。それでこの山吹き飛ばしちゃうえばどうですか」

「……それだ！」「」

もうミラクル連発だね、ネロは。

と心の中で褒めつつタにがんばれと声をかけた。

そして……

「アルマゲドン」

とタが唱えた。

俺たちは何が来るかな、何が来るかな、とわくわくしながら待っていたが何も起こらず、5分ぐらいが過ぎた。

「おい、『アルマゲドン』は失敗か」

「……いや、そんなはずはない。しっかりと力を感じた」





町への最終難関（後書き）

今回は面しろ要素ないです。

町に到着？

「うう……」

どうも、数奇だ。

俺は今どこにいるか分からない。というか、体のどの部位がどの部位か分からない。

体を動かそうとすると猛烈な痛みが体中を電気のように駆け巡る。

おお、マジでヤベエ。痛すぎる。

「おい……おい、大丈夫か？」

あまりの痛みに意識がもうろうとする中、その声をかけてきた人物のほうに顔を向けると、それは夕だった。

昔からこういうやつだった、自分のせいで友達がいけないことになっているのに平然と声をかけてくる奴だった。

……超イラツとくる。

「大丈夫なわけあるかああっ……っ！ 痛いっっっ！」

上半身を叫びながら起こした瞬間、この世のものとは思えないほどの痛みが俺を襲った。

あまりの痛みにあああああ、と言っていると夕がため息をつきながら杖を構えた。

「そんなに急に動くからだろう。はい、リカバリー」

「何でお前がため息つい……っ、いつてえええっっっ！？」

夕が回復魔法を唱えた瞬間、ガチョンキョという音とともに、猛烈な痛みが襲ってきた。

「ぐわあああっっっ！！ 夕てめえ何してんだよおおっっっ！！」

と言つと夕は「教えてやろう」と言つてから偉そうに腕を組んで説明し始めた。

もちろん、この間にも痛みは続いている。

「俺の、…か、い、ふ、く、け、い……」

「いいから早く言つてくれえええつつつっ！」

このサド、ドS！俺が痛みで悶え苦しんでるというのに、それを見て面白がつていやがる。

俺が叫びながら頼むと、夕はニヤツと笑つてから、やっと説明した。

「俺は回復系統の魔法使いじゃないからな」

そんなこと分かつてるんですよ！

そしてこの会話の間にも俺の痛みは、どんどん増している。

「俺が回復魔法を使うと、行使されたやつは、痛みに苦しむが、それと引き換えに回復………しない」

「それって相手を拷問するやつだろおおおつつつ！？意味ね

えじゃあああつつん！」

「というのは嘘だ」

「お願いだから本当のこと言つてくださあああつつつい！！」  
負けた。これで通算6回も心が折れたことになる。

そのあと夕はやつと本当のことを言つてくれた。  
嬉しくないことだったけど。

「…まあ、そのまま待つてろ。じきに楽になる………かもしれない」

「おおおい、てめえ今なんつた！？俺このままじゃ死ぬよ！？

勇者早くも死ぬよ！？」

もうここで終わるのか。短い旅だったな。

何て考えていると、だんだんと体中を駆け巡っていた痛みが引いて

いき、夕が「リカバリ」を唱える前からの痛みも綺麗さっぱり消え去っていた。

「…チツ」

「今何で舌打ちした!? お前やっぱり俺のこと殺す気だったろ!」

「ああ（キラッ）」

「キラッじゃねえよ!」

何か一番危ないのは夕な気がしてきた。

「なあ、夕。他の皆はどうした?」

そうそう、やっぱ勇者は仲間のことを一番に思わなきゃね。俺って偉い。

夕は少し考えてからこう答えた。

「…うーん、殺<sup>や</sup>っちゃった」

「ネロおおおつつつ!!」

うう、絶対に勇者一行には紅一点が必要なのに!

と悲しんでいると、「何で僕の名前は叫ばないんですか!?!」と言いながら、瓦礫の山からデブが出てきた。

「お前はお呼びじゃねえんだよ」

「僕の扱い時間が経つにつれて酷くなってますん!?!」

くっ、こんな使えない魔法使い見習いなんていらねえのに。

「数奇さん、呼びました?」

おお、この声は! と思って、デブが出てきた瓦礫の山のほうに目を向けると、そこにはネロがいた。

ネロが生きていたことに感動している俺を見て、夕は「名に騙されてるんだよ」と言いながら俺を見て爆笑していた。もう、慣れてしまったのでツッコまなかった。

ところで今いる場所なんだが……凄<sup>や</sup>いことになってる。

気絶する前にあつた標高20000m越えの山は、跡形もなくなり、山があつた場所には直径約500mぐらいの綺麗なクレーターができていた。  
そして極めつけは……

「……」

誰も声を出さなかった。そりゃそうなるよ。

クレーターを挟んで向かいには町、かろうじて町と言えるものしかなかった。

「夕……」

「夕さん……」

「あ……っ」

皆で-10000。以下の冷たい視線を夕にぶつけた。

瞬間、夕が土下座の姿勢を取った。

「すいませんでしたああああっ……!!!!」

「さあ、行くか」

「そうですね」

「(コクッ)」

「無視しないでくれええっ……!!」

夕の叫び声はむなしく響いた。

\*\*\*\*\*

「……」はあ、はあ「……」

俺たち勇者一行はバカでかいクレーターの中を通過して、さっきいた場所の向かい側に来た。

さっきは直径500mだと言ったが、実際はすり鉢みたいな形をしているので、結構こつち側に来るまで時間がかかった。

ふう、それにしても本当に町はひどいありさまだ。



家が崩れ、協会が吹っ飛び、食べ物焼けて灰になっている。酷いありさまにはなっているが、一応フラグが立つ場所でもあったので、何か今後の冒険に必要な道具を探していると、「これは何ですか?」と言いながら、ネロが神々しく光るサンバイザー的な形をしたものを持ってきた。

それに俺がふれた瞬間『は〜い』と、おなじみの声を出しながら仏陀が現れた。

『よっ』

「よっ」

『いやいやいや、ちよつと待ってよ数奇さん。僕がフレンドリーに接したからって神様に「よっ」は無いよ』

なんだよそれ。せつかくフレンドリーに接してあげたのに

「んで? 何か用すか」

『何かもう慣れちゃったよ、その口調。まあそれはいいとして。』

よく手に入れたね、その《神のサンバイザー》

「これ《神のサンバイザー》って言うの!?!」

サンバイザーみたいな形してるけどさあ、もうちよつ とマシなネ

ーミングはないのかね。

『そうだよ、これは魔王を倒すうえで絶対に必要な装備だよ。それ

でね《神の〜》ってやつを5つ集めてほしいんだよね』

ふ〜ん

「で? こういうのを5つつけて魔王と戦う、と」

『そう。んじゃま、よろしく』

そういうと仏陀は、シュンツ、と効果音を出しながら消えていった。俺と仏陀の会話を周りで聞いていたタたちは、めんどくさそうな顔をしている。

ここで皆の士気を高めるのが勇者の務め……俺もめんどくさいけど。ということ、今回はしっかり締めセリフを言った。

「いざ次なる冒険へ出発!」

「 「 「 ..... 「 「 「

皆俺の後に続かず、無言で歩いて行ってしまった。  
もう心が折れた。

心が折れた回数・7回

続く

次なる冒険の前に少し休憩……そして葛藤（前書き）

サブタイトル長くてもいいですよ

次なる冒険の前に少し休憩……そして葛藤

「なあ、夕。……サブタイおかしくね？」

「……おかしいところがあるか？」

「俺達大した冒険してないよ!？」

どうも数奇だ。

……これもつともな疑問だね。全く、何一つ冒険してないからね。

「……別にいいだろ、スライム倒して、菟威蛇うゑいた倒したじゃないか。

何が不満なんだ？」

「全部だよ！ 何が『何が不満なんだ？』だよつ、雑魚倒して、心が熱くなったクソみてーな敵倒し ただけじゃん!」

「……いいじゃないか、順調順調」

夕は俺と喋るのをやめて、ネロと話し始めた

もうこいつと喋るのが疲れてきた。

俺達は先ほど仏陀をもう一回呼び出した。次はどこに行けばいいんだ？ と聞くのを忘れていてね。

まあ、聞いたは聞いたんだけどね。アバウトが過ぎててね。

まあ、どんな会話をしたかというと。

「おーい、仏陀」

ピカッと目が見えなくなるような、眩しい光を出しながら、『はい』と仏陀が現れた。

「あのさ、次どこ行けばいい？」

『西』

シュッ

という会話だった…… 会話が成立してない!

まあ、俺達勇者一行もやる気が失せて、瓦礫の山に、座って休憩してるところだったし、別にいいんだけどね。

そんな訳で、それから数十分何もせず、俺、ネロ、夕、デブは思いの行動をしていた。

ネロは昼寝、デブも昼寝、夕は何か思案している、俺は空を見上げて「ふう」とため息をついていた。

…… 半数が昼寝していたし、俺は空を見上げて「ふう」と何かかっこつけてため息ついてるし。もうこうなると、夕のほうが勇者に向いている気がしてきた…… と思ってしまう俺。

夕は、昼寝してるネロたちとかっこつけている俺を横目で見ながら、ずっと考え事に浸っている様子だ。

「はあ、何で勇者になっちゃったんだろう」「  
改めて思った疑問を目を閉じながら考えてみた。

第一に…… 何となく

第二に…… 何となく

第三に…… 何となく

…… 俺の頭はおかしいのかもしれない。普通なら何となくで勇者になんかなれないよね。

やべ、俺って…… 天才?

「…それはない」

「冷静にツツコむなよ!」

傷ついたよ、てかお前心の中読めんのかよ。

「ふう……、初めてポジティブに考えのに……」と泣きながらいじけていると、夕が思案顔をやめて

何かを決心した顔で自分のウィンドウを出していた。

「おい、夕。お前何やるつもりだよ」

「……………」

完全な無表情で返答しない夕。

これは夕が危険な考えを思いついた時のサインだ。と、俺は思った。

なぜそんなことが分かったかというところ、現実世界にいたとき一度だけ夕とケンカしたことがあった。

その時夕は俺の家からすぐに出て行って、何だ？と思っていると、急に俺のパソコンが煙を立て始めたのだ。

そのあと俺が夕に土下座して謝ると、夕は「…俺も悪いことをした。お前のパソコンについついウイルスを送ってしまった」と言った。

ようするに、夕が何も喋らずに何かしようとしたら危険ということだ。

と、いう訳で昼寝してたネロ、デブを起こして夕が変なことをしたときに迎撃できるよう身構えさせた。

瞬間、夕はメニューの中の『魔法』にタッチして、『世界支配』にタッチしようとした。

「ゴオルアアアツツッ！」

俺は夕の右手を蹴り上げウィンドウを閉じた。

その早業にネロとデブは口をポカンとあけて驚いていた。

「…何をするんだ。せつかくこの世界から出れると思ったのに」

「いやいやいや、お前こそ何してんだよ！ そんなにこの世界から出たいの……………」

「おっ」

「何でここだけ即答するんだよ！ いつもの溜めはどうした！」

「…いつもの溜めって……なんだ？」  
「？こじ！ ……」？「これだよこれ！」

あまりのボケの多さに、はあ、はあと息が切れる。

もうこれ漫才だろ。あと、もともとの話の趣旨とだんだん違ってきてるし。

「……だが『世界支配』を使えば一発でクリアできるんだぞ」「いきなり元の趣旨に戻さないでくれるかなあ」

ポカーン状態から元に戻った、ネロとデブも会話に交じってきた。しかも夕の味方で。

「そうですね、数奇さん。もういっそ使っちゃいましょうよ」

「僕もそのほうがいいと思いますよ」

「な……っ！」

こ、こいつらゲーム世界の中の登場人物だよね！？ 何でキャラクターなのに『世界支配』使っちゃいましょうってんの！？

で、でも使えば出れるし………おっと、あぶねえ。あやうく夕たちの口車に乗せられるところだった。

いや、もういっそのこと使っちゃえばいいか！ でもなあ……

と葛藤すること約一時間。

ついに結論が出た。

「このまま続ける。だから西に向かって歩くぞ！」

ふう、口車にも乗せられず、折れることもなく、自分の考えを貫き通せた。

皆も文句はありげだけど俺について……っ。

グサツブツシャアアツツ

視界が暗くなって俺は死んだ。

棺桶状態で、続く。







## 悲しみの棺桶

『はあ……………』

どうも、数奇だ。

……ああ、暇だ。なぜ暇かと聞かれればこう答える。

俺がいる場所が『棺桶』の中、だから。

なぜ死んでるかかって？ それは……あれだよ、仲間には殺されたからだよ。

なぜ殺されたかは、俺自身にもわからない。

夕が『世界支配』をしようとして、それを止めた。そのあと相談して、勇者らしく俺が「ちゃんと旅を続ける」と言った瞬間、後ろからグサツとやられちゃったんだよ。

夕は杖の細いほうで思いつき俺の頭を貫き、ネロは手刀で俺の腹部を貫き、デブは懐から取り出したナイフを俺の腹部に突き刺した。……酷いよね。

でも一番驚いたのが、ネロが手刀で俺の腹部を貫いたことだね。

いつもの力の十倍はあったね。

それは置いといて、今、俺が棺桶の中にいるということは分かってくれ。

勇者一行　今は肝心の勇者が死んでいる　　は夕が瓦礫の山にした町を出て、西に進んでいる。

仏陀が教える肝心なヒントがたった一言『西』だったので、あてもなく西に向かって歩いている。

ネロはさつきから棺桶のほうをチラチラと見ている。

「でも本当にいいんですか？　夕さんの魔法なら一発で数奇さんを生き返らせれますよね？」

と急に喋りかけられた。

……正直、数奇を一番酷く殺たのはネロだと思っただが。

「まあ、いい。いてもいなくても同じだ」

「いやっ、それはひどくないですかねえ、夕さん」

「馴れ馴れしく話すなデブ」

「冷静にそんなひどいこと言わないで下さいよ！ これならハイテンションでそういうこと言ってくれる数奇さんのほうがよかった」

「ドMなんですね、デブさんっ」

「無邪気にデブさんって言われるほうが辛い！」

ドMは否定しないんだな。

と心の中でツッコんでしまう夕だった。

『はあ……』

デブに「数奇さんのほうが良かった」とか言われても吐きそうになっただけなのだが。

とりあえず暇だ。デブがドMを否定しなかったとこだけしか面白くなかった。

と考えていると。

テレテレテレテレ

とお馴染みのバトル突入ソングが流れてきた。

『えっ、ちよっ、まっ、ゆ、勇者不在でバトル突入すんの！？』

いや待てよおかしいでしょっ、何で主人公いないのにバトルが始まるわけ！？

と思っていると不意にウィンドウが開いた。

どうやら死んでる俺にもバトルの状況が分かるように、ウィンドウは開かれるらしい。

俺は死んでいるので、ウィンドウには 数奇：この世で最も酷そう

な死に方で死亡」と書いてあった  
つ、ツッコみたい！ けど死んでるから口を動かすことも、体を動かすこともかなわない。

そしてウィンドウは全員の能力値などを表示していった。

夕

LV:12000 HP:15000 MP10000

ネロ

LV:25 HP:250 MP:150

デブ

LV:20 HP:170 MP:250

そして敵の情報も現れた。

ラ○カル

LV:1 HP:1 MP:1

「「「「ラ、ラスカ○うううううつつつつ!?」」」」

全員一緒にのタイミングで叫んだ。

もちろん俺は声を出していないし、外の様子が見えてるわけでもない。

が、心の中で叫んでいるし、一緒にいる気がする。

何でラス○ルなんだよ、これ作った奴どんだ敵とか考えるのめん

どくさかつたんだよ！

ついには「アラ○グマ ラ○カル」パクっちゃったよ！？

ここまでパクっていいことなんて一つもないぞ！ なのに何でパク  
っちゃうかなあ。

と、思う俺。この反応正しいよね。

「よし殺<sup>や</sup>るか」

『何でそこ殺<sup>や</sup>るか。なんだよ！』

声が出ないとわかっていながらツツコンでしまう。

### ラス○ルの攻撃・連続寡<sup>れんぞく</sup>観<sup>かみつき</sup>都鬼

このウィンドウの表示を見て俺はやばいと思った。

……だってラスカ○がやるような攻撃じゃないでしょ。普通は、寡  
観都鬼じゃなくて、噛みつきだもん。やべえ、こりや死ぬな。

と思っていると、デブが「うおっ、き、牙がでかい……っ！ ぎい  
やあああっっっっ！！」

という声を出しているのと、何かがバタツと倒れる音がした。  
瞬間。

デブが死にました

と、ウィンドウに表示された。

やっぱり強かったかあ、とっていると、ネロも「いやあああっ  
っっっ！！」という声を出した。

そしてまた、何かがバタツと倒れる音がした。

おそらくネロだろうと思っていると。ウィンドウに ネロが死にま  
した と表示された。

お、おお？ タも死ぬのか？ タも死ぬのか？

……勘違いしないでくれ、夕も死ぬのかなあ？ と心配してるだけであって、夕が死ぬことに期待しているわけじゃない。

「う、うわあああつつつつー!!」

バタツ

デスブレイカー・夕が死にました

いよっしやあああつつつつつー!!

……今のは気にしないでくれ。

まあ、そんなわけで、

勇者一行全滅

続く





## 勇者一行復活

どうも数奇だ。

前かい……ゴホンゴホン、ついさっき俺が率いる勇者一行は全滅した。……ラス〇ルに。

うん、あのラス〇ル「あらいぐまラスカ〇」の、ラスカ〇。

そして現在、全員棺桶状態でワープ中、もちろん教会に。

皆ワープって消えたらすぐ着くもんだと思ってるだろ？ 実際は軽く30分近くかかる……らしい。

それにしてもあのラスカ〇は強かった、連戦連勝向かうところ敵なしの夕を一撃だからね。攻撃力も半端じゃなかっただろうし、なんたつて先制攻撃できたのが凄いよ、このゲームに「スカウト」とかがあつたら良かった。

ドンッ！ ゴトッ！

「ぐふっ!？」

急にやってきた衝撃に情けなく、「ぐふっ!？」などと言ってしまった。

あれ？ でも俺にやってきた衝撃は体に直接来たような？

と思つて目を開けると、俺が今まで入っていた棺桶がなくなつていた。

ふゝ、やっと出れた。とりあえず皆も棺桶状態から解放されているか確かめなければ。

と、周りを見渡すと、メンバーの棺桶はすぐ見つかった。

……棺桶が見つかったということは、棺桶から出られてないということになるな。

「お〜い、勇者さ〜ん」

俺が皆を棺桶の中から出そうと、ふたを押ししたり、引いたり、ひねったりしているとどこからともなく、軽い陽気な声が聞こえた。ふう、駄目だな、そんなに疲れてないのに幻聴が聞こえるとは。と、思い作業を再開する。

「幻聴じゃないよ〜、現聴だよ〜。……あははははは、今俺うまいこと言ったる。あはははははははっ」

……つまらん。

「どこが!？」

はあ、こうやって心を読まれること何回目だろうか、そんなことを思いながら、声のしたほうに顔を向ける。

そこには、「いかにも神父です!」的服装をした、中性的な美青年がいた。どうやら神父らしい。

だが、ここはなぜか教会では無い、周りが暗闇の棺桶の部分だけスポットライトに照らされているという、不思議な場所だ。

「ねえ、どこが面白くないの? って、聞いてるでしょ?」

「全部」

「ひどっ! マジで?」

俺が「全部」と即答すると、その美青年は、しょぼくねながら壁を人差し指でグリグリしている。

まあ、そんなのは気にしない。とりあえず、ここについて聞かなければ。

「ニコは、どこだ？」

「忠実に勇者の役割を果たすねえ、普通初対面なんだから名前聞くぜ？ な？」

「はあ……」

「何で今めんどくさそうにため息ついたの？ ねえ？」

「あなたの名前は何で……っ」

「俺の名前は、聖・ニコラス、ニックって呼んでくれ」

「めんどくせええええええッ！」

俺はニックのあまりのめんどくささに、降伏のポーズ（四つん這い）をとった。

ニックは四つん這いになっている俺を気にもせず、話つづけている。

「ニコは、『復活の間』だよ。金さえもらえれば、何でも復活させることができるよ」

ふうん、ドラク○でいう「教会」か。

「よし、どんだけ出せばいい」

「450ゴールド」

「安！ マジか」

「え！？ 安いの！ これ結構高いよ。まあ勇者だから当然か、こんなぐらいを安いつていうのは」  
「……………」

いやっ、スライ○倒したら5万ぐらいもらえるし。

と、言えるはずもなく。とりあえず金を払おうと、自分のウィンドウを開いてみると……金が0ゴールドだった。

「……………」  
「……………」

なぜ金がなくなったかは知らないが、とりあえず金を集めるた、ニツクにこの空間から出してもらい、金集めの旅に出たのだが……………」

「何で棺桶を俺が引きずってんだよ!」

これがゲームの世界なら何もせずとも棺桶は後ろについてくるはずなのに、数奇は棺桶を引きずっていた。

何でこういうところだけリアルなんだよ!

棺桶のあまりの重さに歩き回るのが面倒になり、あの謎の空間に戻してもらった。

で、かくかくしかじかとニツクに説明した。

「で、集まった金が225ゴールドと」

「これで生き返らせることは……………無理だよな」

「出来るよ」

「え? え、マジで!??」

「なんたって僕は神の教えを受けた人なんだから」

「おお〜(拍手)」

「でもね、一つ問題があるんだ」

と、急にニツクは暗い顔をして俯いた。が、よく見ると微妙に笑っていた。

「それはね、死んでる三人を全員半分にして生き返らせなくちゃいけないんだよ」

それを聞いた数奇はしばしの沈黙の後、何か決意を固めた顔でニツクを見た。

「じゃあ、デブだけ五分の一にして、あと、ネロを二分の一にして生き返らせてくれ。」

「デブへの扱いひどっ！ え、マジでいいの？ 五分の一とかやったことないよ!？」

「いいんだ、あいつは死んでも」

「……………うん、分かった。じゃあ、生き返らせるか」

と、ニツクが言った次の瞬間。目が見えなくなるほどの閃光とともに、棺桶が消え去り、ネロ、夕、デブが生き返った。と、同時に周囲の風景も元いた場所から、街道に出た。

まあ、この後の道中で、俺は五分の一にしたことを後悔する羽目になる。

続く

## 次なる町への道中

五月五日。

全く五月とは関係ないのだがこの世界に来てからを数えると今日でちょうど五日になる、と、いう訳で五月五日。

どうして五月かというところ、俺が単純にゴールデンウィークが好きだから五月にしたらただけなんだけどね。

もう、最終日だけだね。ゴールデンウィークの五月五日って。

おっと、またいつものあいさつを忘れてしまった。

どうも数奇だ。

今、俺達勇者一行は次の町、『ハイルド』に向かっている。

前かい……ゴホゴホ。この前俺は死んだ仲間を生き返らせるため、金を集めに一人で森やら洞窟やらに行った。ここまで聞くといかにもベタな感じだけど一つだけゲームっぽくないことがあった。

なぜか仲間の棺桶を自分で引きずることになっていた。

うん、驚いたね。自分でだよ、自分で。高校生二人と豚一人分だよ？ これ絶対無理でしょ。

まあ、そのせいで復活に必要な分の金が半分しかゲットできなかった。

その金を持ち、ニックに「半分にして生き返らせるとか無理だよな？」と聞くと、「できるよ」とニックが笑いながら言ったのでそうすることにした。

金をゲットするのに邪魔だったデブには五分の一で復活してもらい、ネロのほうは単純に「二分の一にしたらどうなるんだろう？」という俺の興味本意で二分の一にして復活させた。

もちろん、我が勇者一行の戦闘の要、夕には完全体で復活してもらった。

そして今である。

俺と夕はデブを五分の一にして生き返らせたのを後悔している。

そろそろだ……。そろそろデブに異変が起きる。

俺と夕はテスト十分前のごとく静かにその時を待った。

「うぐう……………ぐっ、ふぬああああ」

始まった。

「ぐぶっ」

あ、終わった

「ふ〜。さ、行きましょう、数奇さん。我らが倒さなければいけない魔王のもとへ！」

「うぜえ」

「ぐぼふうっ！」

俺はデブの後頭部に上段回し蹴りをくらわせた。あゝスカツとした。

ニックが言った「五分の一にする」の意味は性格のことだったらしい。

いわば『五重人格』である。

『五重人格』……………デブが……………『五重人格』。これによって求められるのは……………。

「ぐぶっ……………。はあ……………行きますか。本当は行きたくないけど」

「黙れ」

「ぐはあっ…！」

いびき……………！

これしかあるまい。

ちなみに、至極どうでもいい情報だが『五重人格』にはこれらがある。まず、いつもと変わらない「普通」、何かしら行動が格好良くなる「イケてる」、これは一番最初に出てきたデブのことだ。

ネクラになる「陰湿」、これは今さっきなつてたやつだ。何をするわけでもなく常にぼくとしてしている「呆け<sup>ほう</sup>」。全てがチャラくなる「チャラ男」。

まあ、簡単に言うと、「どれも使えない性格」だ。簡単に言わないと一億年はかかりそうなのでいわないでおく。

あ、忘れてた。

俺が二分の一にして復活させたネロはというと。

「あゝ、デブさん本当に気が狂っちゃいましたね」

と、いつもと変わらず。

どうやら裏表のない人間は何分の一にしようが何ら影響はないようだ。じゃあデブはどれだけ裏表があつたんだって感じだけだな。

まあ、そんな訳でちよくちよくデブの性格が変わるわけだ、十秒に一回のペースで。

……さすがにイライラするだろう？ 十秒に一回のペースでちよこちよこ性格が変わつたらさあ。だからいったん殺して棺桶に入れたから移動しようとも思つちやつたりしちやつたり。

さっきの話なのだが、俺がさすがに駄目かなあと思いつつも鞘から剣を抜き、デブの体を真っ二つにしようとしたとき。「さすがに駄目ですう！」という声と共にネロが抱きついてきたため、この計画は無しとなった。

ほのかにいい香りだった。け、けっして匂いフェチなんかじゃないんだからねっ！

と、不意に夕が俺の顔を見てきた。それもものすごい形相で。



「…おい、数奇。どうするんだコイツ。さすがにイライラしてきたのだが」

「ん。分かってる。やっぱ棺桶にするしかねえだろ」

「…分かった。俺がやろう」

「誰もお前にやってくれなんて言っていないぞ」

「…分かった。俺がやろう」

「別にいいんだけど、お前とやるとなあ……」

「…なんだ心配してくれているのか？ ふんっ、大丈夫だすぐ終わる」

「ああ、心配だ。お前じゃなくてデブがな」

「…ふっ、お前は照れ屋だな」

「お前誰だよ！ うちのお袋でもそんなこと言わねえぞ！」

デブvsタ。……ミジンコvs太陽に近いな。かなり一方的なワ  
ンサイドゲームになっちまうぞ。

と、脳内ツツコミを入れながらも歩き出す。前々から思っていた  
んだが一列じゃないんだよね歩くとき、もうちよっとRPGっぽく  
してほしかった。

まあ、結局デブは放置ということになった。

これでまた一つ厄介ごとが解決されたのだが、ここでまた一つ問  
題が起きた。

今夜の宿だ。

このままじゃ野宿することになってしまふ。これは深刻な問題だ。  
という訳で夕に相談。

「なあ、夕。今夜の宿はどうする？ もうすぐ夜っぽいし」

この問いに夕は眉間にしわを寄せて考え込む。

一瞬の沈黙。そして

「次回、ハイルドの町に到着するかもしれません。また読んでね」

「終わらせたあああああッ!?!?」

続く

## ハイルドにて

「ああ、やっと着いたあ！」

どうも、数奇だ。突然ながらこの挨拶、めんどくさいからやめることにした。とりあえず恥ずかしいんだよね。

今更だけどな。

前かい……ゴホゴホ、（何回この間違えを犯すんだろう？）つい先日、……ってもういいか。これを読んでくれている人なら分かっているはずだ。少ないと思うけど分かってくれているはずだ。

「ふう、やっと着いたな。長かったな」

「そうですねえ」

しみじみとした声で呟いている夕とネロ。まあ、それもそうだろう。何せデブが性格が変わるたびにうづくまるんだから。しかも、昨日は一睡もしないで歩き続けたんだからな。俺も辛かった、デブの性格が変わるたびにフルパワーで蹴り飛ばすのは。

「ちょっと、数奇さんマジでいたいんですけど」

……今のは「チャラ男」状態のデブだ。しかも困ったことに、デブの人格が「チャラ男」から変わってないのだ。ちょうど今日の午前二時あたりから。

元からウザかったのがさらにキレを増してウザくなっている。

「……………」

「あれ？ ちょっとシカトっすか。マジ酷いんですけど、みたいな！ 感じてやっっちゃってますけど」

「うぜえ」

「ぐぶう！」

まあ、そんなデブは放置しておこう。

ところでこの町がどんな街かが分からないのだが、さてどうするか。うーんと思いつつも街の門に近づくと、

「ここはハイルドの町、力によって自分の立場が変わってくる街です」

門の両脇に立っていた、武装した兵士の人が、急に口を開いた。

ビックリしながらもふーん、と納得する勇者一行。しかしデブだけ、「マジで！ それひどくないっすかあ」と言っている。門番がついているということはかなり大きな街らしい。

「…まずは宿を探そう」

疲労困憊しているような声でそう呟く夕。

うん、もうそれ最初っから分かっているから。と夕に言いつつ『力が支配する街ハイルド』に足を踏み入れた。

この街はかなり広く、現実世界にある物で例えると、東京ドーム百個分くらいだそうさ。

これを最初に聞いた時はさすがにその場にへたり込んだね。気が遠くなっちゃったよ。気分は河川敷にいるホームレス、この先ホテルが見つかるのか、と絶望した。しかし、そこらじゅうにホテルを紹介したりするポスターなどが貼ってあったため、目的のホテル

超高級Sランクホテルを見つけることができた。

しかしさすがは『力が支配する街』と言われることはある。このランクのホテルに入るには、ホテルのボーイ……勿論、ゴリマッチ

ヨを倒さなきゃいけないらしい。  
と、いう訳で、

「デブ、逃げ」

「何で俺なんすか！？ あと、『いけ』の『い』の字間違えてますよ！」

「おお、神よ。デブを安らかに逝かせてください」

「それ死ぬの前提になってんじゃないで っ！」

あまりにも駄々をこねるので強制送還。ボーイの所まで吹っ飛ばす。勿論フルパワーで蹴りとばす。

ドンッ！

ボーイにクリーンヒットした。

「あ、す、す、す、すみません」

おそらく精一杯の声を振り絞ったのだろう、声があり得ないほど震えていた。そして精一杯の愛想笑いも浮かべていた。

デブよ、去らば。

「ぎゃあああああああッ！！！！」

ドオンッッッ！

人が繰り出したパンチとは思えないほどの音と共に、デブの体は華麗に空中を滑空していた。勿論地面に着地した時は棺桶状態である。それと同時にしっかりとウィンドウが表示された。

『デブが死にました』

次に出す人は言わずともわかるだろう。

「よろしく、夕」

「ああ」

そして、

「死ね、デスポール」

例によって、地響きと爆炎とが起き、ボーイ……………もろともホテルが消し飛んだ。

「あ ……！」

全員（デブ以外）口を完べきな〇の形にして、呆然と立ち尽くした。

「おい、どうすんだよ夕！ え、街にいるのに野宿なの？ ねえ、野宿すんの!？」

「数奇さんそこツッコむところじゃないです！ 本当にツッコむところは、ホテルを消し飛ばしたところですよ！ まだ自分の睡眠の心配をするんですか!？」

「……………」

そ、そうだった。あ、危ない。あまりに疲労しているためか自己中心になってしまう所だった！

「元から一番自己中心ですよ!！」

自然に心を読む出ない。ネロよ。

と、そうこうしてる間に周りを武装した兵士に囲まれていた。おい、どうすんだよ！ と、目で必死に夕に訴えかけるが夕は気づいてくれない。

夕、気づいてくれ頼む！ 俺たちの友情の厚さはこんなものではないだろ！ きっとテレパシーだって使えるはずだ！ 気づけ、夕！ するとこの願いが通じたのか、夕は振り返ってくれた。

「……………」

気絶。

そう気絶していたのだ。

これで望みは断たれた。おお、神よ、俺達に祝福を。

『呼んだ？』

「今出てくるなよおおおおおッ！ ねえ、今はさあ、このままナレーションで繋ぐところだろ？ 台無しだよ！」

俺がそれを言った瞬間、仏陀の姿が消えた。そして俺、ネロ、夕、棺桶は武装した兵士たちに拘束された。

おそらく王様直属の部隊、逃げれるはずもなく、しっかりと護衛車両に放り込まれた。目隠し、猿ぐつわもつけられた。

俺の最後の悪あがきも虚しく、牢屋に連れて行かれるのだった。

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4945y/>

---

ベタなRPGの中に入ってしまった

2012年1月6日16時31分発行